高齢の母と娘のコミュニケーション（9）
―認知症ケアと他者との関わり―

田中　典子

要旨
本稿では田中 (2022) で考察した時期に続く 2013 年 4 月に焦点を当て、電話での会話と手紙・メモを分析の対象とする。前者は長年続けていた筆者と母との朝の電話会話であり、後者は認知症を心配した筆者が徒歩 1 分程のところに住むようになってから母が筆者の郵便受けに入れたものである。田中 (2021) では「話すこと」と「書くこと」の内容の矛盾に着目し、田中 (2022) ではその内容から母の混乱と心情とを考察した。本稿では、その後の状況の変化を辿り、データから窺うことのできるさまざまな他者との関わりに着目し、それらがどのような支援に結び付いたか、あるいは支援となることが難しかったかを、認知症ケアの視点から振り返る。

Communication between an Elderly Mother and her Daughter (9):
Dementia care and relations with others

TANAKA Noriko

Abstract

This paper focuses on the communication between my mother and myself in April 2013, when my mother was living with dementia. As the data for analysis, like Tanaka (2021) and (2022), I employ the letters and notes my mother wrote to me, as well as the telephone conversations between my mother and myself. Analyzing the data, Tanaka (2021) focused on the contradiction in the written and the spoken data, and Tanaka (2022) further considered my mother's confusion and her feelings. In this paper, I would like to focus on some relations with other people, which are seen in the data, and to consider how they have influenced dementia care.

はじめに

筆者は、認知症の兆候が現れた母を心配し、2011 年 9 月、母の家から徒歩 1 分ほどの所に転居した。以来、母はしばしば筆者のマンションを訪れ、郵便受けにメモや手紙を入れていくようになった。前稿（田中　2022）では 2013 年 2 月と 3 月のこれらのメモ類と電話での会話を分析し、母の混乱の深まりとそれに伴う筆者の困惑とを振り返った。本稿ではそれに続く 4 月のデータに焦点を当て、そこに窺うことのできるさまざまな他者との

関わりについて考察し、主に認知症ケアの視点から、その意味を考えていきたい。

1．先行研究の検討

村上（2021）は、ケアを人間の本質そのものと捉え、次のように述べている。

> 誰の助けも必要とせずに生きることができる人は存在しない。人間社会では、いつも誰かが誰かをサポートしている。ならば、「独りでは生存することができない仲間を助ける生物」として、人間を定義することもできるのではないか。弱さを他の人が支えること。これが人間の条件であり、可能性でもあるといえないだろうか。
>
> （村上 2021: iv）

この意味では、すべての人間は、ケアする側であり、またされる側でもある。そして、状況に応じて、他者からのさまざまな支援を必要としている。ここでは、双方の立場から、いくつかの考え方を参照しておきたい。

1.1　当事者性

外部支援の根幹を成すもののひとつとして、行政的な政策があげられる。その政策決定に関わる世界的な潮流は「当事者主体」ということであろう。筆者も、2018 年に英国のブラッドフォード大学の認知症研究センター (the Centre for Applied Dementia Studies, the University of Bradford) に数か月の滞在をした際、認知症の当事者を交えたガイドライン作りなどが行われているのを目にし、その意義を感じたものである。

英国の中でも特徴的な例として、スコットランドの認知症政策について、徳田（2018）は次のように述べている。

> ここには、認知症の人たちにより組織された、スコットランド認知症ワーキンググループという団体があります。この団体が掲げているのは、「私たちのことを私たち抜きで決めないで」というメッセージです。スコットランドの地方政府が認知症について何らかの政策を打ち出す際には、必ず、このワーキンググループが入って検討がなされることになっています。
>
> （徳田 2018: 105）

一方、当事者の声だけでなく、決定の際、他の人の声も聴くことが重要であるとの指摘もある。精神障害を抱えた人たちとの共同体を運営する向谷地・浦河べてるの家（2006）は以下のように述べる。

（・・・）精神障害者も含めて障害者は、長い間、「自分のことは、自分が決める」という基本的な権利を奪われてきた人たち（『当事者主権』中西正司・上野千鶴子著 岩波新書）であるといえると思います。俗にいうこの「自己決定」の視点は、今や、あらゆる福祉サービスやケアの大原則として広く普及しています。

（・・・）

実は、浦河では全く正反対のことが、当事者性の原則として受け継がれてきました。それは「自分のことは、自分だけで決めない」ということです。それは、いくら「自己決定」といっても、人とのつながりを失い、孤立と孤独の中での「自己決定」は、危ういという経験則が生み出したものです。

（向谷地・浦河べてるの家 2006: 67-68）

また、「当事者とはだれか？」を問うてみる必要もある。中西・上野（2003）は以下のように述べている。

ニーズを持ったとき、人はだれでも当事者になる。ニーズを満たすのがサービスなら、当事者とはサービスのエンドユーザーのことである。だからニーズに応じて、人はだれでも当事者になる可能性を持っている。

（・・・）

ニーズ（必要）とは、欠乏や不足という意味から来ている。私の現在の状態を、こうあってほしい状態に対する不足ととらえて、そうではない新しい現実をつくりだそうとする構想力を持ったときに、はじめて自分のニーズとは何かがわかり、人は当事者になる。

（中西・上野 2003: 2-3）

「当事者」をこのように捉えると、認知症と共に生きる人と同様、その人をケアする人も当事者として捉えられる。その観点から、認知症専門医であり介護家族も診るライフドクターである長谷川 (2021) の言葉は重みを持っている。

近頃は人権意識への配慮から、介護の世界でも「患者さんファースト」が当たり前の流れになっていますが、私はそうした風潮が嫌いです。

だって、守る側の人間に余裕がなければ、結局は守られる側の患者さんだって幸せになれんでしょう。

（・・・）

認知症の介護家族だって、毎日笑っていいんです。

休んでいいし、仕事に行っていいし、遊びに行っていいんです。

というより、患者さんのためにも、そうしなければいけません。

（長谷川 2021: 15-16）

自分自身の仕事や楽しみを持つことに「後ろめたさ」を感じがちな介護家族に対し、彼ら自身も当事者であると考え、そのニーズを重視することの大切さを語っていると言えよう。

1.2　他者との関わり

若年性認知症と診断されてから、当事者として、認知症を持つ人々についての認識を深めるために活動してきた Mitchell (2022) は、他者との関わりの大切さについて以下のように述べている。

(・・・) on days when I feel particularly isolated, I often time my own walks in the hope of bumping into other villagers. It's amazing what a simple hello or a smile can provide if you see no one else in your day, and this doesn't just apply to people with dementia, but to all of us—I know many villagers who do the same. I adore living alone, but I do find myself increasingly lonely and need that human contact to prove to myself that I can still talk; that people will still engage with me; that I exist. (Mitchell 2022: 69)（とりわけ孤独を感じる日には、村の誰かとばったり出会えるといいなと期待して、よく散歩に出かける。他に会う人がいないとき、ちょっとした挨拶や微笑みが与えてくれるのはかけがえのないものであり、これは認知症を持つ人のみならず、誰にでも言えることだ。同じことをする村人を私はたくさん知っている。一人暮らしは大好きだが、だんだん寂しくなってくると、人と接して、自分がまだ話すことができ、皆がまだ私と関わってくれ、私が存在しているのだということを、確かめたくなるのだ。）【和訳は筆者による】

さらに Michell (2022) はある文献[1] に言及し、以下の例を挙げている。

In the 2019 report, a 79-year-old Swedish woman spoke of how her existing social circle shrunk, which in turn made her feel isolated. The problem, she explained, was the lack of understanding about dementia within her friendship group, which meant that they didn't understand that she couldn't remember their regular meeting places any more. This lead to her feeling shamed by her disease and withdrawing from that group. (Mitchell 2022: 70-71) (2019 年の報告で、ある 79 歳の女性は自分の社交の範囲が狭まってしまい、そのために孤独を感じていると

1　文献の詳細は、参考文献 Odzakovic, E., et al. (2019) を参照されたい。

語っていた。彼女によれば、友人たちが認知症をよく理解しておらず、いつも集まる場所を彼女が思い出せないのだということが分からなかったのが問題だった。それで彼女は自分の病を恥ずかしく感じ、交友から遠ざかってしまったのであった。)

【和訳は筆者による】

長谷川（2021）は、他者との関りが認知症の人に与える好影響を指摘している。

また、よそ様の前なので、いい顔をしようとする患者さんもたくさんいるのですが(笑)、実はこれがすごく大事です。

人前でちゃんとしようとすると、脳に気合が入ります。

（長谷川 2021: 110）

介護する人にとっても、他者との関りは大切である。介護に携わるとき「ひとりで抱え込んではいけない」とよく言われる。確かに、ひとりですべてをしようとすればどこかに無理が生じるだろうし､そもそも外部との関わりを持たずに介護は成立しえないであろう。

筆者自身も母の介護に当たるようになった時、外部の支援を求めることの大切さを指摘されることもあり、できるだけ有効な支援を得たいとも考えていた。実際、外部との関わりにさまざまな局面で助けられた。しかし、認知症を持つ母、本人が望まないため、外部からの支援が受けにくいということもあり、外との関わりがすべてうまくいったわけではない。以下、データを基に、その様子を見ていきたい。

2. データ

筆者は、母が健康な時から、2013 年 5 月にグループホームに入所するまで、約 10 年間、ほぼ毎日、電話で母と会話しており、その会話を母の許可[2]を得て録音し談話分析のデータとして用いてきた。本稿では、田中（2022）で扱ったデータに続く 2013 年 4 月の電話での会話と留守電メッセージ、また同時期に筆者の郵便受けに入れられていた母からの手紙・メモを分析対象とする。

記録に当たり、電話の音声をエクセルに文字化し、同日に受け取ったメモ類の記述を同列横に記載した。その際、一枚のメモ類はひとつのセルに記し、その日に何枚投函されたか分かるようにした。両面に書かれたものも一枚と数えた。データ化することで肉筆[3]の

2　2003 年 6 月に口頭で許可を得て録音を開始し、その後、2008 年 8 月に、念のため、本人の署名・捺印の形で書面による許可を取った。

3　サンプルとして、実際の肉筆例を巻末に示す。

ニュアンスは失われてしまうが、誤字・脱字などもできるだけそのまま記載し、推測による箇所には（　）、解読不明の箇所は＊＊＊を付した。表 1 にデータの概要、表 2 に日付毎の詳細を示す。

表 1.　データの概要

媒体	電話	書面（手紙・メモ）
場所	自宅	郵便受け・手渡しなど
参与者	話し手：母（M）82 才 娘（D）59 才[4] D の友人（A）58 才～ 59 才 ＊ 4 月が誕生日のため	書き手：母（M）82 才 (受け手：娘（D）59 才)
収録日	2013 年 4 月	2013 年 4 月
備考	表 2 は、2013 年 4 月のカレンダーである。日付に〇が付されている場合は、電話で会話したことを示す。同日に複数回、会話したものも含む。 　自宅の固定電話からの会話のみ録音し、かつ、個人名などが話題に出てその内容が倫理に関わると判断したものは除いた。 「留守」は、留守番電話にメッセージがあったことを示す。	表 2 の日付の下の数字はその日に受け取った手紙・メモの数であり、両面が使用されていても、1 枚をひとつとして記録した。 　D が夕方に帰宅して郵便受けに見つけることが多かったが、朝や夜に投函されていることもあった。いつ投函されたかは必ずしも正確ではないが、気づいた場合には「朝」「夜」などと記した。

表 2.　データの詳細：2013 年 4 月

	日	月	火	水	木	金	土
〇：電話会話日 □：手紙・メモ枚数		①	②	③	④	⑤	6 留守
				朝 1 夜 1		朝 1	
	⑦留守	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬
	朝 1 1	3	朝 1	朝 1 1 夜 1	day service 開始		朝 1 3 夜 1
	⑭	⑮	⑯	⑰	18	⑲	⑳
	朝 1 午後 1	朝 1 夕方 1	朝 1	夕方 1	夜 1	朝 1 1	朝 1 1
	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗
	1 ?		4 夜 1		朝 1		4
	㉘	㉙	㉚				
	朝 1 1 夕方 1	朝 1	朝 1 2				

4　既刊の「高齢の母と娘のコミュニケーション」(7)（8）で D の年齢記載に誤りがあった。(7）は 58 ～ 59 才、(8）は 59 才である。お詫びして訂正する。

3. 結果と考察

田中（2022）で考察したように、2013 年 2 月から 3 月にかけてメモが入れられる回数が増えたが、4 月は一日に入れられる枚数がさらに増えている。以下に、電話会話と留守番電話へのメッセージ、手紙・メモの内容から、他者との関わりが窺える部分に焦点を当てて考察する。

以下の記述方法について、左に番号[5]が付してあるものが電話会話であり、ここで使用した文字化記号については脚注に示す。留守番電話へのメッセージは、日付の前に《留守番電話》と記す。また、枠中に記載したものが手紙・メモであり、1 枠が 1 枚を、点線は裏側に書かれていたことを表す。

3.1　近隣

田中（2022: 90）で述べたように、M は自らが弾くピアノの音が隣家にうるさいと思われているのではないかと気にしており、その拘りのために隣家を訪れることもあった。このことは D にとって常に気掛かりなことであった。以下の会話では、M は隣家に関する妄想ではないかと思われる事柄を口にしている。

43675	M	本当に夜なんか来たと思ったらスッと帰っちゃってさ
43676	D	誰が？
43677	M	誰だか分かんないけど●〇さん【隣家】[6] じゃないの？
43678	D	あそうなの？
43679	M	うん
43680	D	うんそれは困ったね
43681	M	誰か人が立っててさ

（2013 年 4 月 3 日）

近隣との関係は D にとって難しいことのひとつであった。田中（2022: 100）で、D が M と言い争い、手をあげてしまったことについて述べた。かなり後になって、M が隣家を訪ね、頬を押さえて「□子【D】に叩かれた」と言っていたと隣家の人から聞いて驚いたことがある。D が手をあげたのは覚書にその記載がある日（2013 年 3 月 14 日）のみで、しかも M の頬を叩いた覚えは全くなかった。しかし、M にとっては決して忘れられない出来事であり、その記憶が違った形の妄想を生んだのかもしれなかった。上の会話はそれ

5　2011 年 9 月 1 日の談話から通し番号を付している。
6　【　】は筆者による説明を示す。

に関することではないが、M は常に隣家のことを気にしており、幻覚もあるのかもしれなかった。

3.2　地域包括支援センター

ある時、世話になっていた地域包括支援センターから会合のお知らせがあり、家族会のようなものかと思って出向いた。その集まりで、M の様子などを話し、帰りがけに参加者のひとりからもらった名刺に「高齢者虐待防止センター」という肩書があるのを見て驚いた。筆者は近隣から虐待の疑いを持たれ、さりげなく調べられたのかもしれなかった。

理不尽だという気持ちで、友人にそのことを愚痴ると、「お母さんの訴えを、真剣に取り上げてくれたのだから、良いところに住んでいると思うべきだ」と言われ、考え直した。確かに、認知症の人であっても、その言葉を真剣に受け止め調査する姿勢は行政に求めるべきものであろう。

この地域包括支援センターにはさまざまな形で世話になった。M がごみ出しの曜日を覚えておくことが難しくなり、近隣に何度も訊きに行くようになって困ったことがある。支援センターに相談すると、地域の清掃局に高齢者のためのサービスがあり、庭にバケツを置いて好きな時にごみを入れておけば、回収の日にそこまで取りに来てくれるという情報を得ることができた。

早速このサービスを導入しようと思い、支援センター職員と清掃局員が M の家を訪問してくれ、一緒に説明を受けた。ところが、その説明の中に「高齢者用の特別のサービス」という言葉を聞いた途端、M は「そんなことはしてもらわなくてよい」と拒絶したのである。自身が高齢のために行政の特別サービスを受けるということに反発を感じたようだった。やむなくその日は帰ってもらい、しばらくたってから「ごみ収集の仕方が変わることになった」と異なる説明をし、無事にサービスを導入することができた。この方法によって、ごみ出しの日を忘れてしまうという M の不安がひとつ解消することになった。

3.3　かかりつけ医

「隣家の人が夜に来る」という上の妄想を生んだかもしれない要因として、D が仕事から帰宅した後、しばしば M の家を訪れるようになったことが挙げられる。これにはかかりつけ医からの処方薬が関係している。

M は自らを認知症だとは思っておらず、専門医を訪れることが難しかったが、D は何らかの治療ができないかとその方法を探していた。そんな時、やはり地域で認知症の父親の介護をしていた友人から、アリセプトがよく効いたという話を聞いた。アリセプトは認知症の進行を抑えるといわれている経口薬で、近隣のかかりつけ医にこれを処方してもらえないかと相談した。

この医師は以前から M に睡眠導入剤を処方しており、M が保険証をよく紛失すること

などから、認知的な状況もよく理解してくれていたので、アリセプトを処方してもらうことができた。しかし、M はこの経口薬を飲みたがらず、薬が溜まってしまう状態になった。そこでDは、再び同医師に相談し、認知症の進行を抑えるとされている貼り薬のリバスタッチを 3 月 16 日に導入した（田中 2022: 89「表 3」参照）。

以来、薬の貼り換えのため、D は仕事から帰宅した後、夜に M を訪ねるようになったのだが、それが「知らない人が来る」という妄想を生んだのかもしれない。結局、この薬も M は好まず剥がしてしまうことが多く、その効果はよく分からなかった。認知症の薬に関しては、投薬前後の症状の違いを把握することが大切だと言われている（工藤 2018: 101）が、継続的な薬の使用がうまくいかなかったため、効果を確かめることができなかった。また、認知症の薬には副作用も指摘されているため (ibid.: 101)、M が嫌がっている薬を強いるのも憚られた。

M の様子を分かってくれているかかりつけ医の存在は、D にとって精神的な支えになった。しかし、家庭での介護者は D ひとりであり、仕事で不在が多いため薬の管理など困難なことが多かった。M が嫌がるため、ヘルパーなどの助けを求めることも難しかった。

3.4　接骨院

M の外出先のひとつは徒歩 10 分ほどのところにある接骨院であり、ほとんど毎日通っていた。その院でも状況を理解してくれ、M が何度も同じことを言ったりしても、自然に対応してくれていた。

自然な形で M を見守る場を作るため、D も一緒にマッサージを受けに行くこともあったが、その約束がうまく機能しないこともあった。以下の電話の会話で分かるように、4 日に一緒に接骨院に行ったのだが、その記憶が残っていたのか、翌日も一緒に行くと思ったらしく、５日に D の郵便受けに下のメモがはいっていた。

43717	D	うん、で、あのーうんそれでー 9 時からまた接骨院に私も行こうかなと思うから
43718	M	ああじゃあ [一緒に行こう][7]
43719	D	[うんうん] それじゃーごめんちょっと待ってて
43720	M	あ、[待ってる]
43721	D	[今行くね]

(2013 年 4 月 4 日)

7　[ ]:　オーバーラップの始まりと終わりを示す。この場合、下の［うんうん］と重なる。

□コ【D】と（1緒）[8] に＊＊＊[9] に行くつもりでした　□子のマンションいったらるすでした

(2013 年 4 月 5 日 朝)

3.5　デイサービス

D は仕事中も安心していられる時間を増やしたいと思い、デイサービスを導入した。介護サービスの一環だと言うと嫌がるかもしれないと危惧されたので、M には「イベント」だと説明し、サービス先にお願いして M が好きなピアノを弾く機会を作ってもらった。

44678　M　あ、きょう生命保険の人が来ること？

44679　D　違う生命保険じゃなくてあの一何だっけ〇〇薬局のえーと何だっけな〇〇さん【ケアマネージャー】っていう人がお母さんをイベントに誘いたいんだって

44680　M　あああありがとう

(・・・)

44687　D　楽譜持ってきてもらえたらお母さんピアノ弾いてもらえたらうれしいかもとか言ってたよ

44688　M　ええ？ [そう？]

(2013 年 4 月 11 日)

しかし、M はあまり楽しまなかったようで、一週間ほど経った 19 日、M はデイサービスについて以下のように話している。D は、M の弾いたピアノが「すごく喜ばれた」(D 45438) と M をおだて、何とかデイサービスを続けてほしいと望んだ。それでも「あんまりおもしろくなかった」(M45443) と、やめたい素振りを見せる M に対し、M 自身では言いにくいだろうと思いつつ「じゃあそれは〇〇さんに言えばいいじゃない」(D 45444) とずるい逃げ方をしている。

45427　M　あそこ【デイサービス】ね あんまり楽しくないよ

(・・・)

45436　D　[でも] なんかピアノ弾いたんでしょ？

45437　M　うん [2 曲]

45438　D　[うん]、で、すごく喜ばれたって言ってた

8　(　　)：やや解読が難しいが、筆者が推測した内容を示す。

9　＊＊＊：解読不可能を示す。(えん湊会) とも読める。一緒にどこかに行きたかったのか。

45439　M　そんなことない

（・・・）

45443　M　あんまり面白くなかった（笑）

45444　D　（笑）でもじゃあそれは〇〇さん【ケアマネージャー】に言えばいいじゃない　私よく分かんないから

45445　M　うん

(2013 年 4 月 19 日)

だが、その一週間後の 26 日には M はデイサービスについて楽しそうに語った。「楽しかった」(M 45779) と言ったのは、D の期待に沿おうとしていたのかもしれないが、「ピアノ二つ弾いた」(M 45781) のは、実際に嬉しくもあったのだろう。

参加者たちの会話を「お嫁さんの悪口ばっかり」(M 45789) と非難しているが、「私の悪口とかたまには言って気晴らし」（D 45796）したらという D に対しては、「言わないよなんもわるいところなんかないから」(M 45797) と、気を遣って喜ばせようとしている。ここには M なりのポライトネスが感じられる（田中 2017 参照）。　D も、「なんか気の強い娘なんですよとか言ってさ」(D 45798) と冗談で応じている。

45779　M　あの一昨日楽しかったよ

45780　D　あそうなの？［よかったね］

45781　M　［うんピアノ］二つ弾いた

45782　D　あ、本当？うんみんな楽しんでくれたでしょう

（・・・）

45789　M　みんなお嫁さんの悪口ばっかり言ってるけど

（・・・）

45796　D　［でも］お母さんもいいじゃん私の悪口とか［たまには言って気晴らし］

45797　M　［言わないよなんもわるいところなんかないから］

45798　D　［なんか気の強い］娘なんですよとか言ってさ

(2013 年 4 月 26 日)

また、デイサービスで行なった塗り絵も気に入ったようで、玄関に自分の作品を飾り、D に見せるのを楽しみにしていたようだ。

45820　D　またなんか塗り絵かなんかもやったの？

45821　M　やったの

45822　D　[あそうなんだ]
45823　M　[あ、持ってきて]
45824　D　[あそう]
45825　M　[あの一うちに貼ってある]
45826　D　[貼ってある？ああそうなんだ何]
45827　M　[もし] よかったら□子ひとつ持ってっても
45828　D　あそうなの？

(2013 年 4 月 26 日)

3.6　友人

M にとって友人との語らいは大きな意味を持っていた。とりわけ、女学校時代のクラス会は毎年楽しみに参加していた。しかし、田中 (2017) でも述べたように、認知症によって友人たちとうまく会話することが難しくなったようであった。

しかし、M の状況を理解している D の友人との交わりは、M にとって楽しい時間であったようだ。友人 A は、時々一緒に M の家を訪れてくれた。この日も訪問前に、A は D のマンションから M に電話し、英語を学ぶのが好きな M（田中 2020: 106 参照）のために、敢えて英語で挨拶してくれた（A 44909）。その後、D が電話を替わり、M の好物のシュークリームを持って二人で訪問することを告げると、M はたいへん喜んだ。気に入った訪問者があると、M はいそいそともてなし、認知症の症状も治まるように見えた。

44899　M　[Good morning]

(・・・)

44909　A　Good morning
44910　M　あら嫌だ（笑）
44911　A　（笑）おはようございます（笑）いい発音です

(・・・)

44917　M　たまには△△さん【A】もうちに [いらっしゃらない？]
44918　D　【電話を替わって】[うんあのね]、あ、あとちょっと、た、なんか△△さん【A】お母さんにって言ってねシュークリーム持ってきてくれたからね
44919　M　ああうれしい

(・・・)

44930　D　うんピアノでも弾いてあげたら喜ぶかもしれないよ
44931　M　（笑）じゃあコーヒーとか入れて

(2013 年 4 月 14 日)

訪問中、M は楽しそうにピアノを弾いた。しかし、その日の午後、下のようなメモがはいっていた。隣家がピアノの音をうるさいと思ったかもしれないと心配になったのだろうか。

ピアノをひかないといったのにひいてしまいました　すみません

（2013 年 4 月 14 日 午後）

3.7　個人商店

近隣に昔からある個人商店は、M の状況を理解し、さまざまな形で支えてくれていた。例えば、M が接骨院の帰りに毎日のように買い物に寄っていた青果店の主人は、D が行くと「お母さん、今日はメモを持ってきていたので、うまく買えたみたいよ」などと、様子を伝えてくれた。

この店については、電話のやりとりの中でも触れられている。D が M とよく似ていると言われることを、M は「あら嫌だ」(M 44132) と言いながらも嬉しそうであった。

44127	D	（・・・）だってみんなが言うじゃないよく似てますねって
44128	M	そう？
44129	D	うん
44130	M	誰が言ってたの？
44131	D	△△さん【A】も [言ったし]
44132	M	[あら嫌だ (笑)]
		（・・・）
44137	D	うんあとあそこの八百屋さんも言ってた
44138	M	そう？
44139	D	うんだってあの八百屋さんあの一親子ですって言わないけど分かってたみたいだよ [最初っから]
44140	M	[うん] 私が行くとさっき娘さん来たよとか
44141	D	そうだから似てるからなんじゃないのやっぱり
44142	M	そうかしら

（2013 年 4 月 7 日）

また、近くの電気店にも世話になっており、電球のような小さなものも電話すると届けてくれ、高い場所に取り付けてくれたりもしていた。M は認知症になってから、テレビのリモコンを失くすことがよくあったので、その店でリモコンだけを売ってもらい、予備として置いてあった。

15 日の朝、以下のようなメモが入っていた。テレビのリモコンが見当たらないとのこ

とで、D が持って行ったと思っているようだった。典型的な「もの盗られ妄想」（認知症の人と家族の会 監修 2018: 6）だと言えるだろう。

チャンネル□子【D】が持ってちゃんと思います　テレビのチャンネルが家にありません □子が持っていったのではないのです（か）

(2013 年 4 月 15 日 朝)

すぐに電話すると、M の家に入ってくるのは D しかいないので、D が持って行ったのだろう言う。幸い、電気店から買ってあったリモコンがあったので、それを M の家に持って行くと、以下のように電話で話した。

44955　D　何？お母さんテレビのリモコンが？

（・・・）

44960　M　だから私うち入ってくるのは□子【D】しかいないと思って

（・・・）

44966　M　［昨日］まであったんだよ

（・・・）

44969　D　そうなの？じゃあうちのやつをさ持っていくよ今

(2013 年 4 月 15 日)

その後、M が偶然ハーモニカのケースを開けたとき、テレビのリモコンがきちんとその中にしまってあるのを発見した。しかし、その時には D への疑いは忘れており、全く悪びれずに、ふたりで大笑いした。

M を心配し助けてくれていた電気店の主人は、残念なことに体調を崩し、店を畳むことになった。事情を説明する丁寧な葉書を頂き、M を見守れなくなったことについて「申し訳なく心が痛みますが御許し下さいませ」と書かれてあった。そして、相談できる別の電気店を紹介してくれた。

3.8　D の職場

D の職場である女子大は、M にとって楽しい外出先のひとつになっていた。D が催しに誘うと、M はいつも喜んで参加し、若い学生たちを見て自らの女学校時代を思い出すらしく、「今の人は戦争がなくていい」と羨んでいた。

以下は、春の催しである「ガーデンパーティー」に出かける日の会話である。「雨だけどね」(D 45585)「でも行くでしょ？」(D 45587) という問いに、M は「行く行く」(M 45588) と大乗り気である。D の友人 A（△△さん）も一緒に迎えに行くことを話すと、【家がちらかっていて】「ちょっとみっともない（笑）」(M 45592) と少し恥ずかしそうではあ

るが、嬉しそうでもあった。

45583　D　(・・・) きょうは〇〇【D の勤務校】に行きますよ
45584　M　ああ
45585　D　うん [雨だけどね]
45586　M　[雨でね] うん
45587　D　でも行くでしょ？
45588　M　行く行く
45589　D　うんうんあの一△△さん【A】もね来てるからね
45590　M　あらー
45591　D　うん一緒に行きますから
45592　M　ちょっとみっともない (笑)
45593　D　みっともなくないよ
45594　M　[だらしがない]
(・・・)
45609　D　[きょう] は日曜だから
45610　M　[あそうか]
45611　D　[あの一] マッサージもないから
45612　M　ああそうね
45613　D　あの一うちにいてください
(・・・)
45624　D　じゃあ 10 時頃にお迎えに行きますね
45625　M　うん

(2013 年 4 月 21 日)

迎えに行くまでに M が忘れてマッサージなどに出かけてしまわないように、「きょうは日曜だから」(D 45609)「あの一マッサージもないから」(D 45611) とマッサージは休みであることを思い出させようとしたのだが、その後、下のような皮肉を込めたメモが入っていた。M は自分の記憶が不確かなことを気にしており、それを指摘されるのを嫌っていたのであろう。しかも、A の前でそう言われたのでよけいに腹立たしかったのかもしれない。M にとって楽しいはずの他者との関りにも、プライドが傷つく可能性が隠されていたことが窺える。

私も休み知ってましたけど私の失敗を喜ぶかと思って接骨院にいきます

(2013 年 4 月 21 日？[10])

翌日の電話で M はガーデンパーティーを「とっても楽しかった」(M 45665) と言っているが、同時に「また失敗ちょっとしたね（笑)」(M 45669) と自分の行動を気にしていた。以前、D の職場の学園祭でお茶をこぼしたことや、箱根の温泉で滑って転んだことなど、自分の「失敗」をいつも気にしていた。

筧（2021：145）が指摘するように、認知症の人は「対象物との距離を正確に把握できない」ことにより、お茶をこぼすなどの「失敗」をしがちになるようだ。

45664　D　(・・・) 大丈夫ですか？なんか疲れたかなと思って
45665　M　ああ面白いとっても楽しかった
45666　D　ああじゃあよかったよかった
45667　M　うん
45668　D　うんねえ [なんか]
45669　M　[また] 失敗ちょっとしたね（笑）
45670　D　何もしないよ？
45671　M　あそう？
45672　D　うんうん何にも失敗しませんでした
45673　M　いつかほら風呂場で滑ったのはいつだったっけ？
45674　D　あれは箱根
45675　M　ああ箱根（笑）

(2013 年 4 月 22 日)

また、D にとっても、他者と接する場所として職場は大きな意味を持っていた。M に朝の電話をし、以下のように挨拶して出勤することが多かった。この日は M が「お釜が見当たらない」と言ってきたので、M の家に行って一緒に探した後だった。

45740　D　今会ったばっかりだけど (笑) よかったね見つかって
【お釜がないといって一緒に探した】
45741　M　あああありがとう
45742　D　(笑) じゃあ Have a nice day
45743　M　Thank you

10　何時ごろに郵便受けに入れられたかは不確か。巻末に実物あり。

45744　D　はいじゃーね行ってきます
45745　M　行ってらっしゃい
45746　D　はい

(2013 年 4 月 24 日)

このように慌ただしい中での出勤であり、留守中のことも心配だったが、職場に着くと忙しさに紛れて気分が転換した。とりわけ、それぞれに悩みもあるだろうが、元気で屈託なく見える学生たちと触れ合うことは大きな励ましになった。その若々しい存在自体が私に元気を与えてくれた。様々な状況により、仕事を辞めて介護に専念するという選択もありうるだろう。しかし、私にとっては仕事という世界を持ち続けられたことは幸せであった。

また、介護のことを話せる同僚の存在も貴重であった。介護体験のある同僚から、認知症のこと、グループホームのことなど、さまざまな情報を得ることができた。なにより、そのようなことを話題にできる職場の雰囲気が有難かった。

4.　関りを拒むもの

これまで述べてきたように、M も D もさまざまな他者との関りに助けられていたが、必ずしもその関係がうまくいくとは限らなかった。とりわけ、M にとって D は最も身近な関りのはずであったが、それを拒むように見えることもあった。

4.1　支援への拒否

以下の会話で、M は D と一緒に夕食を食べるのをやめたいと話す。M(45697) は「自分で作る」と言うが、D（45718）は一緒に食べるのは「1 週間にたったの 2 回」だということを理由に、その機会を維持するよう促す。結局、ここでは M は説得されたように思われた。

45697　M　私悪いけどね三度三度自分で作るよ
45698　D　今作ってるじゃない？
（・・・）
45718　D　うんだからあの一私とはさ 1 週間にたったの 2 回だよ？
（・・・）
45728　D　うんじゃあきょうも自由にやっててください
45729　M　はい [どうもありがとう]

(2013 年 4 月 23 日)

4.2　自立への意思

しかし、その日は 5 枚のメモが入っていた。「食事は別々です」と言いながら、「お風呂にも一緒に入って背中を流してもらいたかった」「tel を待ってた」には D に頼りたい気持ちが滲んでいる。一方、最後に夜に入れられたものは理路整然としており、D が仕事をしているので「私のめんどうは見られないと思います」「自分の食事位作れますから安心してください」と自立への意思を見せている。

□子【D】も私も食事は別々です　今家に黄色のおべんとう箱に□子が私の家に持ってきたものです　これは□子がたべるものではないのです＊　私は食べません
今まで□子いたのに帰ってしまいました　どうしたのです
お風呂にも一緒に入って背中を流してもらいたかった
tel を待ってた
□子は大学の先生です　私が年をとっても□子は私のめんどうは見られないと思います　私は丈夫ですので自分の食事位作れますから安心してください　時々今まで＊＊通り□子の家に夕食にいきます　又□子はどうしたいか話し合いましょう【夜】

（2013 年 4 月 23 日）

同様のメモは 27 日にも入っていた。そこにも M の強い意思が綴られている。

□子へ　何時も□子の親切な気持ちは涙が出る程うれしい　でも年をとって自分は自分の食べる位つくりたい　□子がさそってくれる時だけ喜んで行く　何か冷たい母親と思われるけど　そういう生活をしてみたい．ごめんね．[11]
□子と私は別の人間です　□子はしたい様に　私のしたい様に生活したらいいのではないでしょうか？
□子の tel は食べる話ばかりです　□子と私は別々にすんでいるのです　どうして私が何をたべたとかきいてくるのですか　不思ぎです
食事は別々

（2013 年 4 月 27 日）

4.3　混乱

28 日の日曜日、D は友人の A と共に M を訪ねようと電話したが、M は不機嫌であった。その日のメモは以下のようなものだが、D には心当たりがなかった。

□子は待っててといっても向えにきない（迎えに来ない？）　だから□子人＊のかとのを□子の家に持っていきました　その後はどうなてるかわかりません【朝】
今日□子は家に泊る筈でしたよ　帰ってしまいました【夕方】
どこもいかないでご飯だけたべて待ってました　□子はさそってくれませんでした

（2013 年 4 月 28 日）

11　このメモの実物は、巻末参照。

29 日の朝には次のメモが入っており、電話では以下のように話した。M(45953) の「電話待ってます」という「手紙」を入れたという内容と、下のメモとは一致していないが、D が夕食を作ることになっているので、誘いの電話を待っているということなのだろう。しかし、M は終始不機嫌で、D が夕飯を作ることにしたものの、やはり M は自分で作りたかったのかもしれないとも思われた。

今いったのは□子が夕飯をつくることになっています【朝】

（2013 年 4 月 29 日）

45951	M	手紙入れといたよ
45952	D	手紙？
45953	M	電話待ってますって
		（・・・）
45958	D	何？なんか怒ってるの？
45959	M	怒ってないよ
		（・・・）
45967	M	で、ご飯が自分で夕飯作っちゃうよ
45968	D	きょうはのま子さん【一緒に夕食を取ること】私の所でしょ？
45969	M	あそう？
45970	D	うん昨日せっかくアユ買ってきたよ赤羽で　お母さん魚好きだって言ってるから

（2013 年 4 月 29 日）

上のやりとりから分かるのは、このころ、M は D と一緒に食事をする日を覚えておくことができず、D の支援を受け入れたくても、それが難しくなっていたということである。D が仕事をしていたため、一緒に夕飯を取れる日が限られており、そのような不定期な出来事に対応することが困難になっていたのだろう。

筧 (2021: 127) が指摘するように、認知症の人は「『今日、何曜日だっけ？』と 1 日に何度も思う生活」をしており、D との約束を覚えておくことは難しいことだったに違いない。

M が自立を求めたのも本当であろう。しかし、「覚えていられない」ということを認めたくないために、D の支援を拒否する結果なったことも事実であろう。

おわりに

本稿では、2013 年 4 月の電話会話と手紙・メモを基に、他者との関りがケアに与えた

影響を考察した。近隣、地域包括支援センター、かかりつけ医、接骨院、デイサービス、友人、個人商店、筆者の職場など、さまざまな関りに助けられたことが分かる。にもかかわらず、母の混乱はより深まり、筆者はうまく対応することができず、互いの関係にひずみが生じていた。筆者は母の施設入所を考え始めていた。

謝辞

この拙論を書くことを可能にしてくれた亡き母に感謝したい。

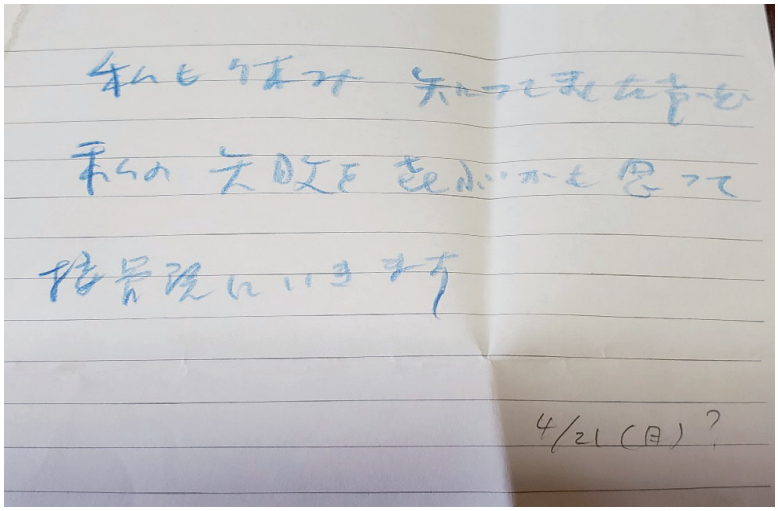
参考文献

筧裕介 (2021)『認知症世界の歩き方』認知症未来共創ハブほか監修、ライツ社.
工藤広伸 (2018)『ムリなくできる親の介護』日本実業出版社.
田中典子 (2017) 高齢の母と娘のコミュニケーション (4) －認知症とポライトネス ―『清泉女子大学紀要』第 64 号 71-90.
--- (2020）高齢の母と娘のコミュニケーション（6）－認知症と共に生きる人の
楽しみ ―『清泉女子大学紀要』第 67 号 113-150.
---（2021）高齢の母と娘のコミュニケーション（7）－「話すこと」・「書くこと」による表現 ― 『清泉女子大学紀要』第 68 号 93-108.
---（2022）高齢の母と娘のコミュニケーション（8）－認知症そして混乱と共に生きる ― 『清泉女子大学紀要』第 69 号 85-103.
徳田雄人 (2018)『認知症フレンドリー社会』岩波新書.
中西正司・上野千鶴子（2003）『当事者主権』岩波新書.
認知症の人と家族の会 監修 (2018)『認知症になった家族との暮らし方』ナツメ社.
長谷川嘉哉 (2021)『ボケ日和』かんき出版.
向谷地生良・浦河べてるの家 (2006)『安心して絶望できる人生』生活人新書.
村上靖彦 (2021)『ケアとは何か ― 看護・福祉で大事なこと ―』中公新書.

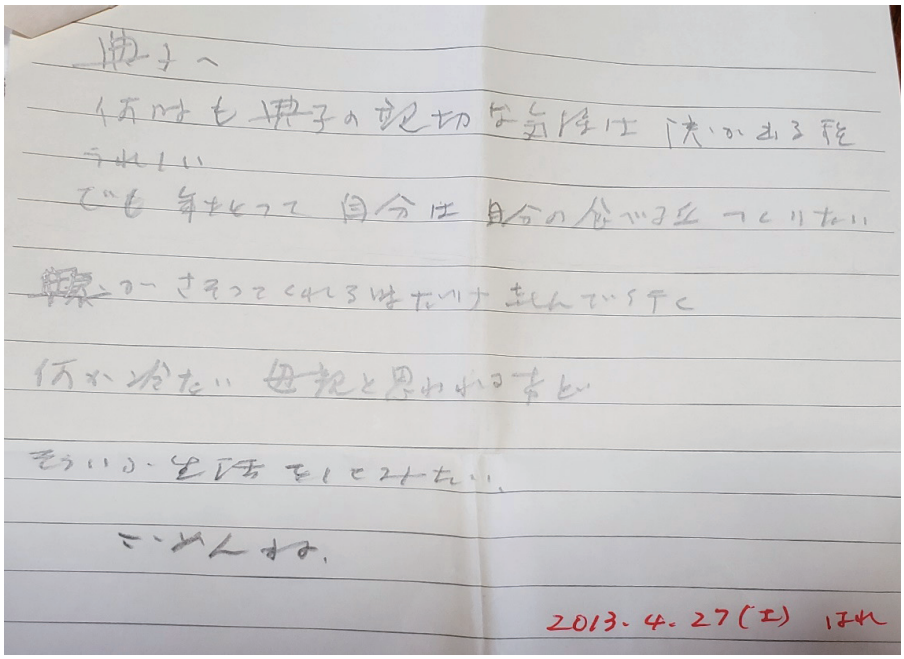
Mitchell, W. (2022). *What I Wish People Knew about Dementia: From someone who knows.* London: Bloomsbury Publishing.
Odzakovic, E., et al. (2019). *'It's Our Pleasure, We Count Cars Here': An exploration of the 'neighbourhood-based connections' for people living alone with dementia.* Cambridge: Cambridge University Press.

付録：母の手紙・メモ例

（受け取った時点で、筆者が日付や天候、時にはコメントなどを書き入れた。）


私も何かつ 知ってまた音を
私の 失敗を 喜ぶかも 思って
怪景況にいきます

4/21（日）？


恵子へ
何時も恵子の親切な気持は 嬉しかある程
うれしい
でも年をとって 自分は 自分の食べる位 つくりたい
~~料~~ー させてくれるはたいけ 楽しんでいて
何か冷たい 母親と思われる事と
そういう生活をしてみたい。
ごめんなさい。
2013.4.27（土） ばば